

1. 開催日時・出席者等

○日時： 平成30年12月10日（月）9:40～10:40

○場所： 中央合同庁舎8号館10階 平井国務大臣室

○Pitchテーマ： デジタルスマートシティの構築に向けて

○招へい者： 金出 武雄 カーネギーメロン大学ワイタカー冠全学教授

○出席者：平井国務大臣、赤石政策統括官（科技）、黒田審議官（科技）、吉川企画官（科技）、柴崎参事官（IT）、信朝補佐官（CIO）、寺井秘書官、西山秘書官、柴山秘書官

2. 金出教授からの説明

○スマートシティへの取り組みは、世界各国で急速に進んでおり、日本においても Society 5.0 のフラッグシッププロジェクトとして、これまでにないデジタルスマートシティのモデル都市・地域を指定して、政策と投資を集中するべきである。都市のデジタルスマート化は機会であるとともに、その遅れは都市の発展を阻害する脅威と捉えるべきだ。

○デジタルスマートシティに限らず、もっと一般的に大学の役割を考えたとき、大学は知識循環エコシステムの中心的役割を担う。つまり大学は、人材に教育を提供し、高度な人材を輩出する産業である。また研究とは、具体的な問題に対して、新たな知識を生み出す産業である。そしてこの知識循環・人材循環は、教授や研究者にも必要で、教授が大学・企業間を行き来して成功した例も多数ある。このような循環は新たな雇用を生み、その地域を活性化させる。大学は実社会に直接的インパクトを与える「知的サービスプロバイダ」なのである。

○「良い」研究とは、現実の問題を解くことで「差」を生み出し、社会にインパクトを与える、すなわち「役に立つ」研究である。「役に立つ」研究と言うと、「応用研究のことですね」とか「基礎研究はどんなことになるかわからないことをするものだ」と言う人がいるが、そうではない。「役に立つ」とは「すぐに使われる」という狭い意味だけではなく、分からなかったことが明らかになるといったことも含まれる。「役に立つ」とは研究における問題意識であり、その意識のない基礎研究などはありえない。

3. 主な質疑応答・議論

○大学の役割は重要だが、日本の企業が大学のシーズを十分に理解していないとの意見があった。しかしながら一方で、大学側も自分たちの研究がどういう意味を持っているのか、どんなことに役立つのかをアピールし、納得させる努力が必要である。米国では外部資金の獲得のために、そのようなことを常日頃から行っているなどの意見があった。

○産学の人材交流という観点から、クロスアポイントメント制度についての議論があった。クロスアポイントメント制度は非常に良い制度であると思う。しかし問題なのは、この制度を利用した研究者のタスクは増えるにも関わらず、現行の給与体系がそれに対応していないことであるなどの議論があった。

○30年前に金出教授が自動運転の研究開発を始めたころの課題の設定の仕方やプロジェクトの進め方に関する質疑応答があった。当時、金出教授がプロジェクトを進めるにあたっては、非常に具体的な課題解決を要求された。例えば、目の前にある地面のぬかるみの状態をセンシングするにはどうすればいいのかなど。研究開発を進めていくには、これくらい具体的な課題があることが重要であるという意見があった。

○海外のスマートシティの動向を見ると、EUでは一つのプラットフォーム上で、さまざまな国の自治体の連携が進んでおり、それぞれの活動の成果などの共有が行われてきている。しかし日本では、国内においてもバラバラに取り組みが行われている。これは自治体に限らず、府省庁や企業にも見受けられる傾向である。この状況を打開するのは、トップのリーダーシップとボトムアップの両方が必要であるという意見があった。

(了)

(速報のため事後修正の可能性あり)